

佐藤先生

御無沙汰しております。

小五でペアアレンツチャンプの支援を受け始めてから一年半大変お世話になりました。

支援を終了しおかげ様でその後楽しく充実した学校生活を送れている今改めて過程と振り返ってみたいと思います。

発端は小一の三学期に教室にひとりで入れなくなったことでした。漢字ドリルや「一番上の花マル」をもらえなかった自分はダメなんだと思いついたところから「まづまづ」が始まりました。

お手本とそっくりに書けない自分もダメ。こ一文書書くの二時間かかるようになりついには教室のドアを開けられなくなりました。親が手をかけすぎたことによる完璧主義と思いつけの強さだった

と思います。

一学期間の母子登校。その後はひとりで滞在できるようになつたものの、遅刻・早退・保健室登校、別室登校、最後には結食だけ登校。完全に登校にはならなかったものの、あらゆるスタイルで不安定な四年間を過ごしました。

そんな次男に対し私は「ママが何とかしてあげるから」と担任やスクールカウンセラーはじめ様々な所へ訪ねて行って「自分が解決しよう」とし続けました。

今考えると、そもそもそんな考えが間違いの根本でした。

私がどうにかしよう、私が解決しようとするほどうまくいかず、長引きました。他の支援団体や個人カウンセラーにも長くかかりましたが、当時私のような考えがまちがっていることを指摘してくれるところはありませんでした。

半分諦めかけていた小五の夏。あと一年しか小中学校生活がない中でこのままでもいいのだらうかと思ひ。最後の望みをかけて面談していた。たのが佐藤先生でした。

当時の不登校界隈（特にネットの世界）では、「学校なんか行かなくていい」という考えが流行りやすくなっていて、私もそれに感化され、「行きたくないなら行かなくていい」と言っていたのですが、次男自身は「本当は学校に行きたかったのです」。

最初は何とか行かせようとしていた私。そしてその後「行かなくていい」と言ってしまう。私。

本当は次男の問題なのに、「私の問題」として、どちらの方向にも勝手に引張ろうとしていた私。

それが次男の自立を阻んでいたのです。

佐藤先生にアドバイスをいただきながら、私が先回りや提案をしない、「次男が自分で決める」とやっていきました。

学校へ行きたいけど行けない。そんな自分が嫌で、何度も「死にたい」と言いました。ただただそれを受け止める……  
その数ヶ月間は、本当に苦しい日々でした。

けれどそのうちに、「この行事には出たい」と自分の意思を言ってくるようになった。失敗しつつもそれが実行できるようになった。なりました。

おそらく、それが自己肯定感を生んだのじゃない。五年生の二月には完全登校できるようになった。なりました。

小六の春には、「友達とどりやたらうまくいくか、自分で実験している」と話して、工夫と失敗と成功体験。六月には自分で入りたい部活がある。

から中学受験したい」と言い出しました。

親は情報提供とお金(送)のみ。決意もやり方の工夫も本人というスタンスで八ヶ月間の受験を走りきり、大満足の春を迎えました。

入学した学校は決して偏差値は高くはないですが、本人がとても気に入っている学校です。

毎日毎日「楽しかった」と言えて帰ってきます。

今、グングン背が伸び、青年らしさの出てきた次男を見て思います。

苦しい小学校時代ではあったけれど、あのもがいた時間があったから彼自身の「自立と自律」が獲得できたのだなあと。

そしてこの子はきっと何とかできるという信じられる気持ちと確かな親子関係。

もちろん親もまだまだ勉強、気が緩んで、私自身が元にもとらないように励まなければなりません。

ご指導くださった佐藤先生に最後の望みで面談をお願いしなかつたら、おそらく今の気持ちにはなっていないかと思ひます。

本当にありがとうございました。

不登校ニ十九カ人の今、まだまだ苦しんでいる親子がたくさんいます。佐藤先生はじめペアレンツキャンプの先生方皆様々、ますますの活躍を心よりお祈り申し上げます。

令和六年一月十二日